



手話 - 日本語同時通訳における作業内容と困難要因に関する研究

著者	霍間 郁実
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7388号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134104

【博士論文概要】

手話－日本語同時通訳における作業内容と困難要因に関する研究

平成 26 年度

霍間郁実

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
障害科学専攻

目的

手話通訳の実践場面において、これまで困難といわれているにも関わらず、学術的な研究がほとんど行われていない手話から日本語への通訳（読み取り通訳）について、これを体系的・客観的に分析し、通訳者がなぜ、どのような困難を感じているのか、また、そのような困難解決するために、養成段階でどのような配慮が必用なのかを明らかにする。本研究では、まず、手話通訳者と手話通訳者養成講座担当者を対象にアンケート調査を行い、手話通訳の困難要因を抽出する。次に、読み取り通訳の作業内容を量的に分析し、訳出方略に関する知見を得るとともに、読み取り通訳にはどのような困難があるのかを訳出作業の分析を通して検討する。さらに、訳出作業の特徴が聞き手の評価に与える影響を調べ、通訳現場で求められている望ましい通訳について考察を行う。これらを通して、通訳者養成の実態、通訳作業の内容、そして通訳への期待を包括した知見を得、それらが手話通訳者養成に有効に資することを目指す。

方法

まず、通訳における困難要因を質問紙調査によって抽出するために、2 種類の調査を行った。1 つは、手話通訳者を対象とし、手話通訳を行う上での困難を聞く内容であり、もう 1 つは、手話通訳者養成を担当している団体と講師を対象とし、手話通訳指導の際に困難なことについて聞く内容とした。

次に、通訳者が困難を感じている日本手話の読み取り通訳について、訳出率、総訳出時間とタイムラグ、変換作業、訳出表現の観点から分析を行い、その作業内容を明らかにした。対象は専門的な技能を有する手話通訳者 5 名とし、通訳課題は、大学における聴覚障害者に関する講義で、ろうの話者が手話で講義を行っている場面とした。話者は、特別支援学校（聴覚障害）に所属する教員 2 名（話者 A、話者 B）であった。また、日本手話の通訳の特徴を明らかにするため、比較的通訳が容易であるとされた対応手話との比較を中心に分析を行った。

さらに、通訳に対する評価を得るため、大学生と大学院生の計 25 名から通訳結果の評価を得た。先行研究を参考に 16 の評価項目を作成し、「通訳に対する各項目の評価」と「通訳利用の際に各項目を重視する程度」を、5 段階評価および自由記述で求めた。また総合的な評価として、通訳全体に対する「内容の分かりやすさ」と「話の聞きやすさ」について、それぞれ 5 点満点での評価と自由記述を求めた。

結果と考察

質問紙調査の結果から、手話通訳者は読み取り通訳に困難を感じており、特に日本手話の読み取り通訳が難しいことが明らかになった。その理由として、通訳者養成段階での日本手話指導が不十分であることが示され、指導内容や制度の改善が必要とされた。一方、対応手話と中間手話に対しては読み取り通訳の困難があまり指摘されず、比較的通訳しやすい手話であると思われた。

作業内容の分析では、対応手話の読み取り通訳では全員が 80%以上の重要文節訳出率であり、個人差も大きくなかった。一方、日本手話では、全体的に対応手話より訳出率が低く、個人差も大きかった。よって、対応手話の通訳であれば多くの通訳者は十分な訳出率を示し、日本手話の通訳では、通訳者によっては訳出に困難を示すことが示唆された。

タイムラグは、通訳者全体の平均は対応手話で 1.3 秒、日本手話で 2.5 秒であった。タイムラグの長さによって、通訳者の訳出方略が推測できることが先行研究で指摘されており、タイムラグの短い通訳者は、「言い換え」や「要約」を用いて、発話量が少なくなるような訳文を生成し、通訳の同時進行性を保っている一方、タイムラグの長い通訳者は、十分な情報を得てから文を整えて訳出する技法をとっているとされている。訳出率の高い通訳者のタイムラグをみると、対応手話では短く、日本手話では長く、手話の種類に合わせて訳出方略を使い分けている通訳者と、対応手話、日本手話のどちらも短く、一貫して即時性を重視した訳出方略を選択している通訳者がいた。よって、通訳者はそれぞれ自分に合った訳出方略を用いることで、高い訳出率を保とうとしていることが推察された。

変換作業では、対応手話における変換作業は、ほぼ「同等」となっており、出される手話単語をそのまま日本語に訳している様子が見られた。「言い換え」は非常に少なく、「付加」と「省略」が多少行われていることが示された。一方、日本手話における変換作業は、対応手話に比べて「言い換え」「付加」「省略」の出現回数が多く、日本手話から日本語への翻訳の段階で様々な通訳の工夫が行われていることが示された。

さらに、質問紙調査の中で「手話の意味はわかっていてもそれを適切な日本語に翻訳できない」という意見が複数みられたことから、それがどのように訳出文に現れているのかを明らかにするため、訳出文の日本語表現の分析を行った。対応手話、日本手話のどちらでも、不自然な日本語文が確認され、日本語文の不自然さは通訳者の処理容量が限界を超えた場合に真っ先に生じるものと思われた。

以上のことから、対応手話の読み取り通訳は、モダリティは異なるものの、扱っている言

語は話者・通訳者ともに日本語であり、表出された単語を順次訳出していく作業となるため、通訳上の困難が少ないことが示された。一方、日本手話の読み取り通訳では通訳者によって訳出率に差があり、訳出率の高い通訳者は種々の変換作業を使いわけて情報を的確に訳出していることや、自然な日本語になるよう文章を整えていること等が示された。しかし、訳出率の低い通訳者は、情報の切り捨てが多く不自然な訳出文になっていることや、沈黙の時間や言いよどみが多く生じていることが示された。

聞き手による評価では、作業内容の分析で示された訳出の特徴が、聞き手の評価にどのような影響を与えるかを調べた。聞き手が通訳利用時に特に重視すると答えたものは「聞き取りやすい発声・発話」「訳の正確性」「十分な情報量」「話者の雰囲気合っていること」であった。「ポーズ」「言いよどみ」「イントネーション」「文の完結性」については、重視するとした聞き手と、重視しないとした聞き手にわかれた。

実際に通訳を聞いて評価をした結果を見ると、評価にポジティブな影響を与える要因は「豊かなイントネーション」「明確な話し方」であり、評価に特にネガティブな影響を与える要因は「文の不完結」「不自然な日本語」「長いタイムラグとポーズ」であった。また、言語的な意味をもたないジェスチャーにも日本語訳をつけることが望ましいとされ、これは音声同時通訳と比較して読み取り通訳に特有のものであると考えられた。

これらの結果を、各通訳の訳出の特徴と照らし合わせた結果、聞き手は日本語の自然さには敏感であり、1文でも不自然な文があれば評価が下がることが示された。タイムラグは短く、さらにばらつきが少ないものが好まれた。ポーズについても同様に、出現回数が少なく、短いほうが好ましいが、一定の長さに保たれるのであれば長くとも許容される傾向もみられた。言いよどみや言い直しは、多ければ不快要因となるが、少なすぎても「感情が伝わらない」と低い評価となり、自然な話し言葉のように多少入っていたほうが望ましいと思われた。

以上のことから、通訳者養成への示唆として、以下のことが挙げられる。本研究では、通訳者の訳出方略を見る指標としてタイムラグを用いたが、タイムラグは通訳者によって差があり、その長さが訳出率や評価の高さに関連している様子は見られなかった。訳出率の高い通訳者の中でも、手話の種類に合わせて訳出方略を使い分けている通訳者と、手話の種類に関わらず一貫して短いタイムラグで訳出を行っている通訳者がみられた。変換作業においても、「同等」を用いて起点言語に忠実に訳出をする、あるいは「付加」を多く用いて訳出をする等、高い訳出率を保つための方略は通訳者によって異なることが示された。このように、通訳者はそれぞれ自分に合ったタイムラグと訳出方略を選んで通訳を行っており、養成段階の受講生には、どの訳出方略が自分に合っているのかを確認させることで、効果的な指導が可能になると思われた。

また、聞き手の期待に応える通訳を行うためには、通訳者は自身の発話に注意し、イントネーションや発音等をコントロールする必要がある。しかし、養成講座の中でこれらについて指導を行っている様子は見られなかった。そのため、聞き手に望まれる通訳に近づくよう、

養成段階で十分な指導を行うとともに、手話通訳者を対象とした研修会等でも繰り返し通訳者に意識させることで改善されることが望まれる。

最後に、本研究の課題として、対象とした通訳場面が限定されていたことが挙げられる。ここでは大学の講義場面を想定して通訳の評価を得ているが、通訳現場や聞き手によって、通訳に対するニーズは異なる。特に、医療現場や会議場面など、通訳者が困難を感じやすい場面において、どのような通訳が求められているのかを、今後具体的に検証していくことで、現場の通訳者に資するさらなる知見が得られると考えられる。